



糸沢本陣

り、越後新発田城主溝口信濃守、越後村上城主榊原式部大輔と他藩の大名も本陣としたことが記されている。

会津を朝出立した大名は、糸沢宿までの約十二里半の道程を一日で踏破しているのである。

糸沢宿を出て端村の羽塩村に入り、羽塩平を東に大きく曲ると正面には三角錐の貝鳴山が大きく現れる。道は標高九三五mの山王峠の峠道となり、山王川の沢を一キロメートルほど登ると萩野原に出る。萩野原にも一里塚があった。羽塩と山王峠の中間には「山王茶屋」があり、元和三年（一六一七）に峠を越す人たちの休憩所として設けられたと伝える（「南山新道中記」）。茶屋を出、陸奥国と下野国の分水嶺となっている山王峠の頂上に立つと、弘化元年（一八四四）の馬頭観音碑が建っている。

峠を下ると下野国横川宿である。横川宿は、《府城の南に当り

行程十五里二十四町、家数三二軒・・・糸沢宿より二里十二町、此より二里二十町中三依村駅に継ぐ村の西南に一里塚あり」とあり、寛文元年（一六六一）に糸沢宿より口止番所が移されている。横川宿より中三依宿に入る。この間に上三依村があり、この村は文政九年（一八二六）に中三依宿が大火にあい、機能が停止したときその肩代わりをしている。

中三依村は、《府城の南に当り行程十八里、家数四八軒・・・村北に一里塚あり》と記されている。この一里塚付近の旧道の道形は、国道一二一号線の東側、男鹿川左岸に平行して走り、一里塚とともに旧態の形で保存されている。

中三依宿より五十里宿に入る。五十里村をもって幕府領（会津藩預地）最南の端村となる。五十里宿は、天和三年（一六八三）の日光地震により水没し、享保八年（一七二三）までの四十年間は湖上輸送をもって対応したが、宿機能はほとんど失っていた。五十里瑚の出現は、参勤交代路の変更や宿駅荷物的大幅減少となり、街道筋の宿駅にとつても大きな打撃であった。

道は、五十里より高原峠（標高一二〇〇m）越え、宇都宮藩領高原新田宿に入る。以前は五十里々藤原間を継ぎ送りしたが、延宝五年（一六七七）に五十里村から会津藩に嘆願され、高原新田宿の取継ぎが開始されたと伝える。会津から二一里二五町の距離にあたる。高原新田宿から藤原宿に入る。道は平坦となり、大原宿、高德宿と進み、鬼怒川を渡って日光神領「大桑宿」に継ぎ、下野街道の終点である今市宿に継ぐ、会津から二九里二七町の道程である。

ここから江戸へは、板橋―鹿沼―楡木の例幣使街道、楡木から壬生、飯塚の壬生街道、新田―小山―春日部―江戸への奥州街道を利用し、会津からは六一里二九町の道である。